

Alert 55号

反天皇制運動

[通巻 436 号]

2021 年
1 月 5 日発行

第 55 期・反天皇制運動連絡会

『文在寅時代の韓国』（文京洙／岩波新書）を読んでいる一番おもしろいのは、やっぱり政権を取る前だ。彼の、3・1 運動や、光州蜂起、4・3 蜂起に対する演説は力強かったけど、そうじゃなく、毎週末に灯される、無数のろうそくの火に押し出されるような自分自身を、おそらく不安げに眺めたに違いない。出来上がったものではなく、これから立ち上がるもの。ぼくは、レーニンが広場に続々と集まってくる群衆を見て震えていた、という話が好きだ。

韓国の「ろうそく革命」の始まりは、たぶん、2008 年の高校生たちによる「米国産（BSE）牛肉輸入抗議デモ」あたりかなと、ぼくは思ってる。そしてその灯は朴槿恵政権時代にも受けつがれ、16 年末から 17 年にかけての、毎週土曜日の大集会・デモで、朴大統領を罷免・逮捕させた。

このデモの特徴は、よく言われるように、脱中心・多様性の運動であるということだ。文京洙さんの記述によれば、集会は「既存の制度的枠組みを超えるラディカルな主張」に彩られ、〈脱中心〉というのは運動のスタイルだけじゃなくて、その内実そのものであったようだ。

手前味噌風にいえば、これはぼくたちの芝居でいう〈草のざわめき〉に似ている。刈っても刈ってもまた起き上がる、草たちのひそやかな響きの共鳴。みんな、ひとつのことを言ってるようで、実はてんでバラバラのことしか言っていないという、空間が織り重なるような群衆シーンだ。リモートでは、きっとできないし、やる意味もない。うん、今年もやっぱり、ものごとが立ち上がる「現場」に、常にいたいと思う。

（池内文平）

今月の Alert ●「女系」でも「男系」でも天皇制は廃止だ！

そして「皇女」制度を許すな！——*2

反天ジャーナル ●——なかもりけいこ、よこやま みちふみ、ななこ*3

状況批評 ●教育における「不当な支配」——朝鮮学校「高校無償化」裁判から考える——佐野通夫*4

書評 ●多様な視点と「熱さ」が交差する追悼文集

——『語り継ぐ 1969 糟谷孝幸追悼 50 年——その生と死——宮部彰*6

太田昌国のみたび夢は夜ひらく（127）

●ひどい政治の横行と、それを批判する論理と倫理の水準——太田昌国*7

マスコミじかけの天皇制（54）（壊憲天皇制・象徴天皇教国家 批判 その 19

●「眞子」「秋篠宮」発言と「小室母子」非難——天野恵一*8

野次馬日誌*9 集会の真相*10 学習会報告*11 反天日誌*12 集会情報*12



250 円

●定期購読をお願いします（送料共年間 4000 円）
●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: hanten@ten-no.net
●以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の

Alert

「女系」でも「男系」でも天皇制廃止だ！ そして「皇女」制度を許すな！



二〇二一年『朝日新聞』の第一報の一面は、コロナと元農水相の賄賂で埋め尽くされた。第二報（三日）も同様だ。新年早々、紙面全体のコロナ関連記事が占める割合は実に多い。昨年、運動現場へのコロナ感染拡大の影響は決して小さくなかったが、天皇たちが受けた影響の大きさを、改めてこの紙面から思う。まずは一般参賀中止で始まる二〇二一年に、天皇たちは継続する不運を感じたことだろう。

一般参賀は一九四八年から続く皇室行事だが、新年一般参賀が中止されたのは今年を入れて三回のみだ。過去の二回は一九八九年昭和天皇Xデーの年とその翌年で、裕仁の重篤と死後の服喪が理由だった。天皇自身の都合を除き、何があっても続けてきた一般参賀は、五万から一〇万以上を超える天皇信奉者前に天皇がスピーチする貴重な機会であり、その様子をテレビや新聞で我々に見せつける大きな天皇イベントなのだ。それを断念しなければならなかった天皇一族は、昨年からつづく「公務」の自粛の継続を予感させられたに違いない。

初詣の記事とならび、一般参賀の様子や天皇の「言葉」、家族写真やベランダにすらりと並ぶ天皇夫婦と成年皇族たち、打ち振られる「日の丸」の小旗の波。今年はそういった映像や記事がない。天皇たちにとっては、一般参賀中止にとどまらず、コロナ禍に「配慮した」お祝いムードや高価で派手な装い（ティアラ）の自粛など、見せどころ激減の

状況は続く。そして、「次善の策」としてのビデオメッセージ。一日のビデオメッセージは社会面に小さめの家族（天皇・皇后・愛子）写真付き記事。三日の「新年祝賀の儀」の記事はさらに小さめで写真なし。天皇報道が比較的多い『朝日』でさえ、記事はこれだけであつた。それでも十分すぎると思うが。

メッセージでは、「皆が互いに思いやりを持って助け合い、支え合いながら、進んで行くことを心から願っています。（中略）我が国と世界の人々の安寧と幸せ、そして平和を祈ります」と述べる。「民主的痛覚」（伊藤晃）というのをマジで感じさせる天皇のセリフで、同様の言葉は何度も聞くが、その度に呆れかえり怒りがわく。天皇の「願い」や「祈り」とは無関係に社会は動いているのだ。たとえば、寒風吹きすさぶ路上で年越しを余儀なくされている人々を支援する人々は、天皇に示唆されて動いているわけではまったくない。しかも天皇一族は、年末年始であふれ路上で過ごす人たちの、寒さや悲しさや無念さとは無縁のところで生きている。あるいは、医療・保健・福祉の現場だけでなく、危険と隣り合わせだったり、理不尽な条件下で働く人たち、独居老人、一人親、失職した人々等々の過酷な現実を知る必要もない。天皇・皇族がその「血統」を根拠に、国によって丁寧に保護されているからにはほかならない。そんな不条理があつていいはずがないし、ましてや政府や行政の無策の代償としての「お言葉」や「公務」を担当する国家機関は百害あつ

て一利なし、なのだ。

一方、新聞は大きく紙面を割いて「おひとりさま」記事や養子縁組の家族物語など、婚姻や「血の論理」とは別の選択肢を肯定的に扱う記事を組んでいた。明らかに天皇制の論理とは別方向の紙面づくりで、興味深い。読者の多くはそのような記事を望んでいるということだ。

ほんの少し遡り、昨年末に向けては眞子の結婚話と秋篠宮の親父発言、そして皇位継承問題として政府が指し示した「皇女」制度問題でメディアはそれなりに沸騰していた。眞子の「お気持ち」、眞子の結婚に対する批判、二四条を引っ張り出して結婚を認めて見せた秋篠宮への複雑な気分がにじむ肯定・否定論と多々あるが、まずは、そのさなかにできた「皇女」制度問題。

この案は八年ほど前から出ている。ただ、これが「皇位継承問題」の解決策にはなり得ず、あまり前面には出てこなかった。しかし今回、これが政府案として動き出しそうな気配だ。「男系男子」原則なのだそう。女系でも男系でも天皇制廃止、を当然の前提に、政府が構想する「皇女」制度に反対している。この「血統」だけで特別優遇される「皇女」たち。天皇制という身分社会に、さらに特別な身分を作ろうというのだ。私たちは「元節」と「天皇誕生日」に反対する2・11・23連続行動」実行委でも新天皇制論議を始めている。ともに深めていこう。

（大子）

「デジタル庁」構想と監視社会

監視問題に関わってきて何年になるのだろうか。テクノロジーの進化とともに私たちの日常は張り巡らされた監視網の中にあるように感じる。利便性や安心・安全というキーワードと引き換えにプライバシーを切り売りしながら生活しているのかもしれない。IT技術の進歩でビッグデータ時代となり、監視の概念が薄れ、さらにSNSなどによって相互監視ともいえる社会となっている。こうしたデジタル社会における監視を国家でやろうとしているのが菅政権の「デジタル庁」構想だ。国の省庁だけでなく地方自治体のシステムも統一し、すべての権限を集中させようとしている。

政府は行政手続などがパソコンで出来ると利便性を強調し、その基盤システムとしてマイナンバーカードを活用するという。低迷するカード普及率のアップも狙い、今年三月健康保険証への利用が始まる。さらに運転免許証との一体化も検討している。コロナ禍でデジタル化へのハードルが低くなっている今、自ら監視社会を招き入れることになりそうだ。デジタル庁構想の目的は官民における個人情報情報の自由な流通と利用だ。それは一方で住民監視の浸透と選別と排除ももたらす。プライバシーは権利でもある。売り渡さないために私たちのデジタルツールをつくっていききたい。

(なかもりけいこ)

いまだ男子の当事者研究

「人の話を聞かない男たち」「謝らない男たち」「何かと恋愛的文脈で受け取る男たち」「女性の身体に無理解な男たち」(等々)。こう言われて納得し自省する人はいるだろうか。あるいは、こうした類型化を男のステレオタイプ化だとしてその主張に反発するだろうか。

冒頭に引用した男性像の類型化を行ったのは、『さよなら、俺たち』(スタンド・ブックス、二〇二〇)の著者である清田隆之(桃山商事)である。清田の男性性問題へのアプローチはユニークである。清田は、恋バナ収集の現場で見聞きしたエピソード(恋愛相談にくるのはほとんど女性である)を手掛かりに、自らの男性性を見つめ直し、洗い落とそうとする。つまり、女の目に映る男を通して男性像を構築し、自らと男性性の問題を主題化するのである。これは、男性というジェンダーを見つめ直す、これまでの男性学やメンズ・リブとは一線を画す独自のアプローチであろう。

男性が社会的マジョリティである以上、自らの男性性への鈍感さと現状維持に向けた制度的・構造的な強靱さを解体することは容易な実践でないことは明らかだ。しかし、そんな中において、清田の当事者研究は小さな希望の一つではあるまいか、そんな読後感を抱かせてくれた。

(ゆい)やま みち(ふみ)

マコノユウウツ

天皇の新年メッセージはたいした新鮮みもなく、六分ほどしっかりカメラ目線で、そこは誰かとは大違いたが、言いそうなことを言ったただだ。誰かあのビデオにわざわざアクセスするのかな? それよりはアキシノんちの騒ぎのほうが面白いのか、あっちからこっちからの意見が飛び交っている。

アキシノとキコ夫婦それぞれへのバッシングは今さらではないけど、誕生日記者会見でアキシノは憲法まで持ち出して、大人になった娘の結婚に意味不明なことを言うし、アキシノ家の担当にはなりたくないと言った職員が言ったとか、「あのうちとは親戚になりたくない」とキコが言ったとか、ガヤガヤ。

ナルヒトがマサコへの人格否定問題を発言したころ、同じようなことを言った気がするけど、マコカコアイコも同じだね。一度結婚するって言っちゃったから意地になってるのか? やゝめた! って言ったら案になるよ。

「国民に喜ばれ」る結婚をして皇籍を離れても、「皇女」でいるよう言われてパートで「公務」をさせられる。これまでどおりあちこちからバッシングをされて不自由な生活を続けていくしかない。自分で生き方を決められないのは辛かろう。アメリカ移住もアリなんではない? きっと力コも協力してくれるよ。さあ。どうする?

(ななこ)

状況批評

思想・状況・批評

教育における「不当な支配」

朝鮮学校「高校無償化」裁判から考える

佐野通夫

（朝鮮学校「無償化」排除に反対する連絡会）

二〇一〇年に施行された「高校無償化」制度は、朝鮮高校の生徒排除という思いがけない問題を引き起こし、それは五件の裁判として争われた。その裁判の中で、被告・国が排除の根拠として挙げたものが教育基本法第一六条第一項の「不当な支配」であった。

〈教育基本法第一六条〉

〇六年の教育基本法改正により、従前の一九四七年同法第一〇条は、「第三章 教育行政」という章名をもった第一六条に変えられた。

四七年法

第十条（教育行政） 教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである。

〇六年法

（教育行政）

第十六条 教育は、不当な支配に服することなく、この法律及び他の法律の定めるところにより行われるべきものであり、教育行政は、国と地方公共団体との適切な役割分担及び相互の協力の下、公正かつ適正に行われなければならない。

四七年法第一〇条は、その立法経緯から「教育行政の任務と限界を定めた総括的规定である」と一般的に解されてきた。しかし、行政の解釈がそのような自らを制限するものであるはずはなく、教育基本法制定直後に文部省内に作られた教育法令研究会が出した『教育基本法の解説』（四七年）は、「教育に介入してはならない現実的な勢力」として「政党のほか、官僚、財閥、組合等の、国民全体ではない、一部の勢力」とした。

「不当な支配」が大きく問題とされたのは、「学テ事件」であった。六一年に実施された学力テスト（「全国中学校一斉力調査」）に対して、その実施を

阻止しようとした労組員が、建造物侵入罪、公務執行妨害罪そして暴行罪として起訴されたことに対して、第一審、第二審は、前記学力テストは違法であるとして、公務執行妨害罪の成立を否定し、共同暴行罪の成立のみを認めた。最高裁七六年五月二一日判決は「教基法が……戦前における教育に対する過度の国家的介入、統制に対する反省から生まれたものであることに照らせば」としながらも、「このことから、教育内容に対する行政の権力的介入が一切排除されているものであるとの結論を導き出すことは、早計である」として、原判決を破棄し、公務執行妨害罪の成立を認めたものである。このような経緯があったため、四七年法第一〇条は「教職員組合が教育への国家介入を排除しようとする際の根拠として用いられてきたと批判され」、〇六年の「政府は」に始まる（教育振興基本計画）という見出しの付された第十七条を加え、第一六条に後半部を加え、および旧第二項を第二項から第四項へと変える改正となった。

〈「高校無償化」制度からの朝鮮学校の排除〉

このように成立の前後からさまざまな問題をはらんできた教育基本法第一六条第一項が、再度浮上してきたのが、「高校無償化」裁判である。

一〇年三月、民主党政権は「公立高等学校に係る授業料の不徴収及び高等学校等就学支援金の支給に関する法律」を成立させた。この法律の目的は、公立高等学校においては授業料の不徴収、私立の同等機関は「就学支援金」を支給することによって、学校に通う子どもたちの経済的負担を軽減しようとするものであり、対象となる学校は専修学校、各種学校まで含むというものであった。ところが、実施直前の一〇年二月、各種学校の認可を受けており、上記法案からは当然に「無償化」の対象となる朝鮮高校を外せという声が挙がり、他の外国人学校三校は一〇年四月三〇日に「無償化」の対象校として告示されたにも関わらず、「規定八」対象とされた朝鮮高校一〇校のみが指定から外された。一月になって指定を申請するための「規程」が公布されたことにより、各朝鮮高校は申請を行ない、規程では年度内に指定がなされることになっていたが、民主党政権はしかるべき時期に指定も不指定もしないまま、一二年一二月の第二次安倍内閣発足にいたった。内閣成立直後の二月二八日になされた施策が、下村文科大臣による教育の機会均等とは無関係な拉致問題の解決の妨げになるという外交的、政治的意見に基づく朝鮮

高校「無償化」除外方針の発表であった。翌一三年二月一〇日に朝鮮高校を「無償化」の対象とする根拠になる規定八を施行規則から削除する省令改正を公布・施行するとともに、朝鮮高校に「不指定」処分を通知した。この不指定処分の理由は①規定八を削除したこと、および②指定に関する規程に定める指定の基準への適合性を審査してきたところ、同規程第一三条に適合すると認めるに至らなかったこと、とされていた。この二つの理由は本来、相矛盾するものである。なぜならば、①で規定八が削除されれば、その規定八を根拠として定められた②の「指定に関する規程」は効力を失うので、同規程への適合も不適合もありえない。このことは、東京高裁の裁判の中で、国も自認することである。

そこで、朝鮮学園や在学生・卒業生が原告となり、五つの裁判で、規定八の削除の不当性を争った。しかし、地裁・高裁合わせて一〇の判決の中で大阪地裁一七年七月二八日判決以外は、すべて原告が訴えている規定八削除の違法性についての判断を回避し、規程第一三条適合性に「疑い」があれば、文科大臣の裁量の範囲内であるとする判決となっている。二つの理由は本来、相矛盾するものである以上、判決のこの構造自体が問題とされなければならない。

〈規程第一三条に適合すると認めるに至らなかったこと〉とは

不指定通知書には、「規程第一三条に適合すると認めるに至らなかったこと」と記されているだけであった。規程第一三条とは、「(適正な学校運営)前条に規定するもののほか、指定教育施設は、就学支援金の授業料に係る債権の弁済への確実な充当など法令に基づく学校の運営を適正に行わなければならない」というものである。この通知のみでは、なぜ認めるに至らないかは分からない。

訴訟の中で、国が持ち出したのが、教基法第一六条の「不当な支配」であった。国の主張は「北朝鮮や朝鮮総聯の影響力は否定できず、その関係性が教育基本法一六条一項で禁じる『不当な支配』に当たらないことに確証を得ることができない」というものである。朝鮮学校は、民族学校である。本国との関係、民族団体との関係は存在してしかるべきものである。

前掲「学テ」判決が、「本件学力調査が……行政調査として教基法一〇条との関係において適法とされつつあるかどうかを判断するについては、……本

件の調査方法に教育に対する不当な支配とみられる要素はないか等の問題を検討しなければならない」として、五ページにわたる検討を加えているのに対して、これら朝鮮学校の請求を否定した判決は、何をもって教育基本法第一六条にいう「不当な支配」であるかを定義することなく、朝鮮総聯との関係があることから、「不当な支配」に当たらないことについて十分な確証を得ることができない」という国の主張を認め、大阪地裁判決を除いて、裁判所は「不当な支配」の範疇を明らかにすることなく、すべて文部科学大臣の裁量の範囲内としてしまっている。

それは、裁判所HP裁判例収載の判例の表記にも関わる。広島地裁、大阪地裁(それを受けた大阪高裁)は、当事者名を「原告学校法人A」、「B学校」、「A高級学校」等と仮名で表記している。それは、判例集として当然のことであり、当事者が誰であっても、法論理として同等のことが当てはまるということを示し、また当事者のプライバシーを守るものでもあろう。ところが、それ以外の判決では学校名が明記されている。朝鮮高校であることの表示は、裁判所も当事者が朝鮮関連だからこのようにするという結論ありきの態度であることを示すものである。

教育における「不当な支配」の範疇を文科大臣の裁量に委ねるといふ裁判所のあり方は、文科省・所轄庁の増長を招き、教育の自由を大きく制限することになりかねない。裁判所が朝鮮学校に対してとったのと同じ判断が、宗教系学校等に適用されればどうなるのか。日本における国家による近代学校制度の構築の中で、私立学校等の「教育の自由」が、キリスト教学校の認可問題、「教育勅語」「天皇写真」への拝礼の問題として脅かされてきた。それが、四七年法第一〇条において教育への国家の統制を排除し「不当な支配に服することなく」として記された経緯であったといえることができる。

もちろん、外国人・他民族の居住者が増えていく社会にあって、四七年法の「国民全体に対し」という文言もその内実が問われるべきものであった。教育は子どもが学ぶことを保障するものでなければならぬ。〇六年法で「国民全体に対し」という文言自体はなくなったが、さらに外国人学校・民族学校の権利が十分に守られる制度や社会の理解を確立することが必要である。日本の裁判所に求めても仕方ないことはあるが、裁判所は、このような状況を踏まえて判断を下さねばならなかった。



多様な視点と「熱さ」が交差する追悼文集

『語り継ぐ1969 糟谷孝幸追悼50年』

——その生と死——

宮部 彰（緑の党運営委員・気候危機担当）

冠婚葬祭や追悼が嫌いな私は、天野さんからの書評原稿の依頼を軽く受けてしまったことを、そのあとで少し後悔した。何しろ、9・11テロに対するアメリカのアフガン攻撃に反対する集会で、主催者がテロの犠牲者に対する黙祷のために起立を呼びかけた時も、一人だけ座ったまま拒否したという変わり者なのだから。

また、「歴史から学ぶ」「過去から学ぶ」という感覚に違和感を抱いてもいたからだ。過去を語るときに、どうしても「戦友意識」や「あの時は良かった感」があふれ出してしまふ雰囲気嫌いだったからでもある。あるいは、過去をひとまとめにして解釈してしまうような姿勢にも……。

■一九六九年の多様な解釈と「熱さ」の共通性

この本も、そういう雰囲気がないわけではない。しかし、ざっと読み直してみても、そうでもないな、と改めて感じている。追悼というものが醸し出してしまふ「嫌だな」という感情が、私の中にあまり生じないのだ。

私も寄稿した一人であるが、「どうせ、おもしろくない追悼文が羅列されるのでは」という変わり者の予感を、見事に裏切ってくれた編集人の方々に感謝したい。

「1969年の闘争の意義を歴史的・大局的に位置づけよう」として語る人」「その時代の雰囲気

の中でどう生きようとしていたかを語る人」「その時代を別の現場で闘っていた時の共通感覚を語る人」「虐殺の現場について語る人」「糟谷の後の世代でその闘う姿勢に共感して運動を担い続けている人」「権力の暴力に対する怒りを告発する人」などなど、多様な視点からの文章が収められている。

このような、多様な視点と、多様な歴史解釈と、多様な引き継ぎ方と、多様な政治性と、多様な世代と、多様な現場と、多様な生きざまの文章が収められ、多様な人々の価値観や生き方が浮かび上がっている。何しろ七〇余名も寄稿している。歴史的な資料も、もちろん収められている。

しかし同時に、当然のことだがそれらの寄稿文には共通性が厳然としてある。それは糟谷の闘いと、その時代の闘争に対する共感と、それを引き継ぐという姿勢である。その引き継ぎ方が多様で、ただ「忘れないでいよう」というものであったり、「闘いを引き継ぐ」という勇ましいものであったり、「振り返ることでの新しい発見」であったりしても、である。そして、そこに温度差があっても、「熱さ」、あるいは「暖かさ」を感じざるをえない。

そして同時に、未来への希望が見出しづらい時代に、希望の可能性を見出そうという姿勢も感じられる。

■「糟谷の言葉」に触れた天野さんと私の違い

ただ、私が不思議だったのは、追悼集でありながら、糟谷が虐殺される闘争に参加する直前に書き留めた「糟谷の言葉」について語る人がほとんどいなかったことだ。というよりも、天野さんと私だけだったのだ。糟谷という一人の人間の「思い」「苦悩」に注目して語る人が少なく、時代語り、自分語りが多いのだ。それはそれで良いのであり、「糟谷の言葉」について語ったとしても、それが自分語りにならざるを得ないのだが……、やはり不思議だった。

それでもなお、天野さんと私が「糟谷の言葉」の中で注目した部分は異なっている。私は前半部分に、天野さんは後半部分に。この中にも視点の多様性が表れている。

天野さんは、糟谷の言葉から、その時代を「決死の覚悟」の時代と振り返っている。なんと、天野さんも、この「一月決戦」に向かう日の前日に、「遺書めいた文章をノートに書き連ねた」というのだ。これだけでも「反天連ニュース」の読者は、読んでみたくなるのではないだろうか。そのうえで、私との視点・感性の違い、そして共通性も感じてほしい。

ただし、その解釈と受け取る感覚も、読み手にとって多様だと思う。多様な解釈と感慨が、さらに多様な解釈と感慨を生起させる。そこに希望への可能性がある、そんな思いを強くさせる追悼集である。

（糟谷孝幸追悼50周年プロジェクト 編、

社会評論社刊、二〇二〇年、二〇〇〇円＋税）

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 127



ひどい政治の横行と、それを批判する論理と倫理の水準

自分が住む国はもとより、わずかな例外を除いて世界のどこの国を見ても、これ以上の愚か者はいないというような人物が、有権者の一定の支持の下で、あるいは独裁的な強権を行使して、首相や大統領の座に居座っている。したがって、旧年から新年に持ち越された、「政治」「社会」をめぐる難問は、新型コロナウイルスの蔓延状況に限らず数多くあって、このような場で取り上げるべき課題も、変わりなく多い。ここでは、昨年末に注目すべき報道が二、三あった死刑の問題に触れたい。

二〇二〇年は、二〇一一年以来九年ぶりに死刑「未執行」の一年だった。七年八カ月間続いた第二次安倍政権以降では三九人の死刑が執行され、現上川陽子法相も前回の在任中に一六人も人びとの死刑執行を命じた。法務省によれば、昨年末の時点での死刑確定者は一一〇人だという。

昨年二月五日、免田栄さんが亡くなった。九五歳だった。一九四八年熊本県で起きた強盗殺人事件の容疑者とされて四九年に逮捕され、五二年に死刑確定。冤罪を訴えて六次にわたる再審請求を行ない、八〇年に再審開始が確定し、八三年に再審無罪となった。日本の裁判史上初めて、死刑囚

が再審無罪となった。三四年の歳月が流れていた。八〇年代には、免田さんに続いて、三人の確定死刑囚が再審無罪となって釈放された。

二月二日、最高裁小法廷は、一九六六年の強盗殺人事件で死刑が確定した袴田巖さんの裁判をやり直す再審を認めなかった東京高裁決定（一八年六月）を取り消し、審理を高裁に差し戻した。一四年三月の静岡地裁は、有罪の最有力証拠は捜査機関によって「捏造されたものである」との疑問は拭えない」とし、「これ以上拘束を続けることは耐え難いほど正義に反する」と述べて、袴田さんを釈放した。だが、再審無罪の決定がなされるまでは袴田さんは確定死刑囚であり続けており、法務省がいう一一〇人の死刑確定者のなかに袴田さんは入れられている。袴田さんは八四歳である。

ここで思い起こすべきことがある。東京高検検事長・黒川弘務の定年が閣議決定によって半年間延長されたのは、わずか一カ月前の昨年一月末日のことだった。この「違法な」決議を後追いで容認するために、検察官の定年を延長する検察庁法改正案が衆議院で審議入りしたのは四月一六日である。その一カ月後の五月一六日、元検事総長、元最高検検事ら一四人が名を連ねた、同法案への

「反対意見書」が発表された。この閣議決定を正当化する安倍首相の詭弁を三権分立主義の否定として捉え、「朕は国家である」と豪語したフランス絶対王政時代のルイ一四世に準えるなど、明快な批判の論理で評判となった声明である。私は、法案批判としては正当な論理を展開しているこの声明文を、裏目読みせざるを得なかった。声明は、公訴権を独占し、捜査権も有する検察官の責任の重大性に触れて、「検察官は自ら捜査によって収集した証拠等の資料に基づいて起訴すべき事件か否かを判定する役割を担って」おり、その意味では「司法の前衛」だとの自負を語っている。証拠を捏造したり、自らの立証に不利な証拠は隠したりして、冤罪事案を積極的に作り出してきた歴代検察権力の「自己批判」にまで及ばざるを得ない論理は胚胎されていると言えるが、現実にはどうか。一四人の署名者は、検察界の最高権力者の地位に上り詰めた過去を有することで、同時代を生きた免田さんや袴田さんが強いられる冤罪への責任を〈存在論的に〉有していると言える。冤罪と推定されながら、処刑されたり獄死したりした人びとに對しても。

政府と政権与党が行なう横暴な政治への批判と反対運動は、できる限り広範な形で形成されるべきことは当然だろう。同時に心すべきことは、あまりにひどい〈政治〉が横行しているとき、私たちはそれに対する批判の論理と倫理の水準を、無自覚的にせよ、下げてしまいがちだということだ。その意味で、半分の共感を持ちつつも裏目読みも同時に行なわなければならない言説が溢れている時代に私たちは生きているのだ。（一月四日記）

「眞子」「秋篠宮」発言と「小室母子」非難

—「壊憲天皇制・象徴天皇教国家」批判 その19—



天野恵一

人から人にも、動物にもうつる感染症（新型コロナウイルス）は人々の交流（移動）の増加によって、感染が拡大する。だから菅義偉首相の、感染がおさまっていない段階での「Go Toトラベル」「Go Toイート」政策は、必然的に感染拡大政策となった。この誰でも理解できる事実を手前勝手な「エビデンス」なるものを示して認めようとする政権の、その政策のストップが遅れたため、さらに感染は、全国的（とくに首都圏などの都市部）に止めようもなく拡大し続けている年末から正月三箇日。わたしは女性週刊誌『セブン』・『自身』・『週刊女性』三誌と、女性週刊誌同様この間毎号皇室記事を欠かさない『週刊文春』と『週刊新潮』の皇室記事を、まとめて読んでみた。

「国民」にやめろと呼びかけている多人数会食をくりかえしていた菅ら権力政治家の態度に読めるのは、コロナへの危機感の薄さというより、自分たちは高齢者でも特権的医療にガードされているから、まず安心、より具体的にいえば、医療の対応の遅れで続出している（PCR検査にまでたどりつかなかった人も少なくない）死者に自分たちは入ることはまずないという、特権的安心感である。

「コロナと皇室」という問題を考えるとき、忘れてはいけないのは、この「特権」である。天皇一族は、かかりつけの医者、どこか皇居の中に「宮内庁病院」という大病院を、国民の税金で保有している超特権的家族である。この点を忘れて論ずべきではあるまい。

もっとも、この間の週刊誌の皇室情報のテーマの中心は、やはり、「眞子さま・小室さん」の結婚はどうなる?であった。婚約相手とされた男（小室）の母に四〇〇万「借金」があるという問題が取り沙汰され、二〇一八年、親の秋篠宮が「納采の儀」は行えない」とストップ発言（一月三〇日）、娘眞子、結婚への強い意思を表明する「お気持ち」なる文章を発表（二〇二〇年一月二三日）、その三日後四〇〇万返金要求していた男の側が「返金要求はもうしない」との意向表明、秋篠宮が誕生日会見で「結婚を認める」と発言（一月三〇日）。西村泰彦宮内庁長官が小室サイドに金銭トラブルの説明責任を果たすべきだと「異例発言」（二月一〇日）。こうした流れにそった記事が大量生産されているわけだが、ほぼ共通するトーンは、小室（家）は神聖なる「眞子さま」（一族）の相手としては、ふさわしくない、という小室（家）の全面バッシング（一・五億円の眞子の一時金ねらい）であり、そんな男に執着する「眞子さま」への非難であり、さらには、そんな結婚を認めた秋篠宮への抗議である（各誌とも宮内庁にそうした抗議が殺到しているという事実を紹介しながら、そうした抗議の内容をなぞるような記事が書かれている）。その中でも、『女性セブン』（一月七日／一四日合併号）の、小室と母「もう一人のパパ 追いつけられなかった父は自死を選んだ」は、どぎつい私生活暴露（プライバシー侵害）記事である。また『週刊文春』（二月一〇日号）「虚栄の履歴 小室さん母子の正体」も、同（二月一七日号）の「一・

五億円一時金なしでは……小室さん母子粉飾の借金人生」もどぎつい記事である。さらに『週刊新潮』（二月一〇日号）の「眞子」さまに結婚でどうなる『髪結いの亭主の生活設計』の方も同様である。

こうした非難は、決して天皇制そのものの否定とか批判というのではなく、まったくその逆の心情と思想の表明であるにすぎない。皇室から民間（平民）に出る女性への一億五千万円の一時金の支払いという、とんでもない（特権）制度自体が批判されているのではなく、あんな男（の家）にくれてやるのは許せないと主張しているだけなのだ（この点はみな共通している）。神聖な天皇一族の関係者に（あんな）一家がなることが、まるごと許されないと非難しているだけなのである。

各誌であれこれと理解が割れている二月一〇日の秋篠宮の発言はどうか。

「結婚することは認めるということですが」と言いながら「現状では納采の儀は行えない」と語り、かつての自分の発言では、結婚のための条件とした「多くの人が納得し喜んでくれる状況」づくりは実現していないとも語っている。

「認める」けれど「認めない」という、意味不明発言。「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立」という憲法二四条の原則を尊重するというポーズを示しての「認める」発言であったが、その原則でいけば、父親が「認める」などと公言してみせること自体が、まったくおかしいではないか。憲法は、そんな権限はないと宣言しているのだから。やはり皇族にはそうした（自由）はないのだ。

こうした皇室情報から私たちが読みとるべきは、象徴天皇制の（超特権的奴隷制）という奇妙でグロテスクな政治的性格ではないのか。

11月29日

11月29日、12月31日

【11月29日】

徳仁、雅子◆衆参両院が開設から130年で、参院本会議場で開いた記念式典に出席。徳仁が「お言葉」を述べる。眞子も出席。

【11月30日】

秋篠宮◆55歳の誕生日。これに先立ち、東京・赤坂御用地の赤坂東邸で記者会見し、長女眞子の結婚について「認める」が、「私の主観になりますけれども、決して多くの人が納得し、喜んでくれている状況ではない」との認識を示す。「立皇嗣の礼」が8日に行われたことに「安堵した」「以前と変わらず、一つ一つのことを大切に務めていきたい」。発表された眞子と小室圭の結婚への強い決意をにじませた文書を踏まえた上で「婚姻は両性の合意のみに基づく」とする憲法の規定を挙げ「本人たちが本当にそう思う気持ちであれば、親としてはそれを尊重するべきだ」。

眞子スキャンダル◆加藤勝信・官房長官が記者会見で、秋篠宮が眞子の結婚について「認める」などと述べたことに、政府として静観する姿勢を示す。

「新年祝賀の儀」◆宮内庁が「新年祝賀の儀」について、新型コロナウイルス禍のための規模を縮小して実施すると発表。

皇位継承策◆菅義偉首相が参院本会議で、安定的な皇位継承策の結論を出す時期について明言を避け「静かな環境で検討が

行われるよう配慮する必要がある、現時点で具体的な日程は言えない」。立憲民主党の枝野幸男代表が、政府が皇族数減少に伴う皇室活動の担い手確保策として検討している「皇女」制度について、喫緊に検討すべき皇統維持に向けた対応策には当たらないとの認識を示す。「政府には安定的な皇位継承につながる議論をしてほしいと強く求めたい」。

皇居外苑◆環境省の有識者検討会が、皇居外苑（東京都千代田区）でのイベント開催などを容認するよう求める報告書を出筋で了承。日本文化の海外発信につながるかと判断したと報道。

【12月1日】

愛子◆19歳の誕生日。

【12月2日】

「皇女」◆国民民主党の足立信也・参院幹事長が、「女性宮家についても議論するようになっていたはず。それと違う形で出てきた」。

「慰安婦」問題◆加藤勝信・官房長官が記者会見で、ドイツの首都ベルリン市ミツテ区議会による「従軍慰安婦」被害を象徴する少女像の永続的設置に向けた決議案の採択に関し「極めて残念だ」「引き続きさまざまな関係者にアプローチし、像の速やかな撤去を求めたい」。

【12月3日】

徳仁、雅子◆文化功労者に選ばれた漫才

の西川きよしと皇居・宮殿で面会。

【12月4日】

皇位継承策◆日本維新の会の片山虎之助・共同代表が「皇女」制度創設について「皇女になる方や結婚する人の意見はどうか。やや思い付きのような感じ」。国民民主党の玉木雄一郎代表が「公務の負担軽減にとどまらず、タブーなき議論をしないと天皇がいなくなる時代が来るかもしれない」。

【12月8日】

皇室対策◆菅義偉首相が、皇族数減少に伴う皇室活動の担い手確保策に関し「国民のコンセンサスを得るためには、十分な分析と慎重な手続が必要だ」。安定的な皇位継承策について「男系継承が古来例外なく維持されてきた重みを踏まえ、慎重かつ丁寧に検討を行う」との従来の見解を改めて示す。

【12月9日】

雅子◆57歳の誕生日。宮内庁を通じて文書を発表。

【12月10日】

眞子スキャンダル◆宮内庁の西村泰彦長官が記者会見で、眞子との婚約が内定している小室圭に関して批判の報道があることについて「説明責任を果たすべき方が、果たしていくことが極めて重要」と述べ、小室側に対応を求める。

【12月14日】

徳仁、雅子◆東京都千代田区のホテルを訪れ、地球環境行動会議（GEA）が主催する国際会議の開会式に出席。

【12月17日】

徳仁、雅子◆赤坂御所で、セイコーエプソンの子会社「エプソンミズベ」（長野県諏訪市）で雇用されている障害者と、オンラインで「交流」。

【12月18日】

「即位の礼」◆法務省が、徳仁の「即位礼正殿の儀」に伴う特別基準恩赦について、100件の出願を受理し、28件を恩赦相当と決定したと公表。前年実施した政令恩赦「復権令」と合わせ、即位の礼に関する恩赦はすべて終了する。

【12月21日】

皇室関連予算◆2021年度の政府予算案で、皇室ゆかりの美術品などを収蔵、展示する「三の丸尚蔵館」の建て替え、整備費用などとして39億円を盛り込み、皇居・東御苑の本丸地区の道路改修に1億8千万円を充てるほか、翌年度中に完成予定の秋篠宮一家が暮らす宮邸の改修工事費として、19億円を計上、当年3月に東京・高輪の「仙洞御所」に住まいを移した明仁、美智子が赤坂御用地に転居する費用も盛り込んだと報道。新型コロナウイルスの感染拡大防止対策として、宮内庁の全ての職員に当たる約千人が自宅などでテレワークに対応できるよう、専用のソフトウェアを端末に導入する費用800万円を計上したという。

【12月23日】

明仁◆87歳の誕生日。

【12月23日】

徳仁、雅子◆赤坂御所で、新型コロナウイルスのワクチンなどに関して厚生労働省の福島靖正・医務技監から「進講」を受ける。

代替わり◆政府が、皇位継承に関する一連の行事を締めくくった最後の式典委員会を首相官邸で開く。2019年4月の明仁の天皇退位と、翌5月の徳仁の即位に伴う儀式などを総括。関係予算と決算の額を確認。19年度に最も多くの経費がかかり、内閣府で26億6千万円を計上、24億5千万円を執行し、宮内庁で22億2千万円を計上、19億2千万円を執行したと報道。18年に設置した「皇位継承式典事務局」は近く記録集と写真集の作成を終えて3月末に廃止され、記録集



殺害されたホームレス女性を追悼し、暴力と排除に抗議する

一月一六日深夜、路上生活者の女性、渋谷区幡ヶ谷のバス停のベンチに座っていたところを、頭を殴られ、殺された。容疑者の男は、「お金をあげるからバス停からどいてほしいと頼んだが、応じてもらえず腹が立った」「痛い思いをさせれば、いなくなると思う」と供述したという。どいてくれないから、言いつことを聞かないから、殴り殺すなど、あつていいはずがない。しかし、現実として渋谷区行政は、野宿者の寝場所を暴力的に奪っている。綺麗で快適なまちづくりを理由に、よ

と写真集は2月ごろに国立や都道府県立の図書館に配布し、一般に公開する予定。

12月24日

眞子スキャンダル◆宮内庁の西村泰彦長官が定例記者会見で「誤った情報があるならば、きちんと正しつつ、分かりやすく説明を行う。それによって、国民の皆さまに事実関係を正確に理解してもらうことができると考えている」。

12月25日

歌会始◆宮内庁が、翌年1月15日に皇居・宮殿で開かれる「歌会始の儀」で、歌が

り劣悪な状況に追いやっている。

一月六日、「殺害されたホームレス女性を追悼し、暴力と排除に抗議するキャンドルデモ」で、渋谷の街を歩いた。主催は、女性ホームレスグループ・ノラ、アジア女性資料センター、ふえみん、なる会議の四団体。約一七〇名が参加、報道記事もいくつも出た。反響に、すこし怖くなった。女性の野宿者は、目立たないようにしていても、目立ってしまう。この社会において、女性は、いまだ有徴化されている。何年か前、野宿の女性に、生活保護をとって施設に入った方がいい、野宿しているとレイプされるぞ、と発言した男性が、別の野宿女性に抗議され、親切に教えてやったのに、と怒鳴りちらすのを、目の当たりにしたことを思い出す。私自身を含む、親切ないわゆる支援者と、最終的に石を入れ

詠み上げられる一般の入選者10人を発表。徳仁が特別に招いて歌を披露する召人は、小説家で文化功労者の加賀乙彦が務める

12月29日

徳仁◆宮内庁が、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って取りやめとなった新年一般参賀に代わる徳仁のビデオメッセージを、1月1日に公表すると明らかに。

佳子◆26歳の誕生日。

12月30日

天皇避難◆福島第1原発事故の直後、当

たレジ袋で殴り殺した男との間に、地続きのものがあるように感じて、怖い。様々な支援体制にアクセスできると同時に、路上に寝泊まりできることが当たり前になればいい。女性も当然そこにいる。殺すな。(首藤久美子)

即大訴訟 活発な弁論

……………

一月、「即位・大嘗祭違憲訴訟」の二つの裁判があった。まずは、一月九日の「人格権に基づく差止請求訴訟」第三回口頭弁論。即位・大嘗祭儀式の違憲性を問うこの訴訟だが、今回新たに、先日行われた「立皇嗣の礼」についても訴因に追加することにした。ところが、国側は「即大」と立皇嗣の礼とは関係ないと言い張る(政府は一連の「代替わり」儀式の最後に「立皇嗣の礼」を位置づけているにも関わらず)。

時の民主党の菅直人政権が、天皇明仁らに京都か京都以西に避難するよう非公式に打診していたと報道。宮内庁側が明仁の意向として「国民が避難していないのにあり得ない」と伝え、政権側は断念したという。複数の元官邸幹部が皇位継承資格者である秋篠宮の長男悠仁の京都避難も検討したと明かす。菅元首相が共同通信社の取材に「頭の中で考えていたことは事実だが、私の方から陛下に打診したり、誰かに言ったりしたことはない」。

「即大」儀式に関する予算執行はすでになされているので、国側は、差し止めについてはもはや「訴えの利益はない」として門前払いをねらっているのは明らか。このまま訴因の追加の是非についてあれこれもめているうちに、「立皇嗣の礼」についても予算が執行されてしまつては困るということもあり、やや不満は残るところだが、「即大」については訴えを取り下げ、形式的に「新訴」という形で「立皇嗣の礼」に関する差し止めを求めることにした。国側は、反論の書面をこの一月末までに提出、二月、三月と引き続き弁論期日が入った。

二日は、「国家賠償請求訴訟」の第六回口頭弁論。着席すると、裁判長がこれまでとは別人。あとで確認すると弁護士にも連絡がなかったという。裁判官が交代すると「弁論更新」がなさ

れるが、当然その準備もしていない。これはひどい。今回原告側は二本の準備書面を出し、国が協賛した「国民祭典」の問題点と、違憲論の「法律的枠組み」について主張。違憲論の内容については、次回以降さらに詳細に展開される予定。

こちらの訴訟も「立皇嗣の礼」について新たに訴因として追加しているが、こちらは儀式の差し止めとは異なり、まだまだじっくり議論できる余地が大きい。京都でも、「抜穂の儀」についての住民訴訟が始まっている。裁判という場で「代替わり」儀式の問題性を問いつける裁判にご注目下さい。

(即位・大嘗祭違憲訴訟事務局／新孝一)

「敵基地攻撃力」とは「敵地先制攻撃力」

「敵基地攻撃力」保有の公然化は延期されたが、イージスアショアの代替として、陸上イージスを艦載するイージス艦二隻と12式誘導弾の長射程化や長射程のミサイルの開発が打ち出された。バイデン米新政権との協議などを経て公然化することも想定されるし、公然化しない実質保有も問題にしなければならぬ。

このような状況に対して、「大軍拡と基地強化にNOーアクション2020」(以下、アクション2020)は、「敵基地攻撃力」とは「敵地先制攻撃力」

に他ならないという観点から、いくつかの取り組みを行ってきた。一つは、「トランプからバイデンへ 米国の『軍産複合体』はどこへ向かうのか 敵地先制攻撃力保有と宇宙軍拡に反対する12・20集会」である。同集会では、アメリカの航空宇宙産業に詳しい西川純子さんからお話を伺った。西川さんのお話は、宇宙の制覇を目指す「宇宙帝国主義」といった指摘など、示唆に富むものであった。参加者は三十七名。

翌日、「戦争・治安・改憲NOー総行動」(以下、総行動)と共催で「持つな！敵地先制攻撃力 12・21防衛省デモ」。主催者からのもの他、「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」から託さ

れた申し入れを防衛省に手交した。参加者は、七五名。一月二十四日には、「アクション2020」主催の「STOP P！敵基地攻撃能力&大軍拡予算 財務省交渉」。参加者三〇名。参加者からは、財務省官僚も抑止力論を前提に大軍拡を容認している在り様があらさまになったといった感想が寄せられている。財務省交渉を持ったのは、初めて。これからも、防衛省のみならず、財務省の責任も問いつけていきたい。なお一月十七日には、「STOP 敵基地攻撃力アクション」呼びかけで行われた国会正門前におけるダイインにも、「アクション2020」のメンバーも参加した。

【学習会報告】

坂野潤治『明治憲法史』(新日本出版社・二〇一九年)

憲法を軸にして近現代日本の(政党)政治史を捉えるときに、明治憲法の時代―総力戦の時代―日本国憲法の時代として、つまり「戦前」・「戦中」・「戦後」として分けて捉えるべきだ、と言った著者は、「平和と民主主義の時代」は戦後だけでなく戦前にも存在していたのだ、「戦前」は「戦後」へと引き継がれたのだ、とも言った。ここで言われる民主主義とは、藩閥勢力が天皇大権を強くして議会権限を弱めるようにつくられた明治憲法体制の構造上の制約のなか

で、選挙で当選した代議士が集まる議会の勢力配置を反映させた政党内閣の地位をいかにして確保するかをめぐる憲法解釈と諸政党の模索のことであり、平和とは軍部を縛る憲法解釈に基づいた立憲的な政治による軍部の抑制のことである。このような視点から整理された本書は、たとえばかつて天皇機関説と政党内閣の正当化、そして軍部に一定の立憲主義的な縛りを加えた美濃部達吉が、軍部・官僚・専門家をまとめて政策立案をする内閣調査局と内閣審議会とい

う「上からのファシズム」の機関の原型(円卓巨頭会議)を提唱し、議会に代わるべきだ、と主張したことを国家社会主義への転向だと指摘するなど面白い論点が散りばめられている。

とはいえ、坂野の言う自由と民主主義の「戦前」なるものは治安警察法や治安維持法などを不問に付して議会外の自由と民主主義への実践を無視することで成り立っていると言わねばならないし、帝國主義本国が破局的な結末をむかえる日中戦争以前を「平和」だと捉えるのは、植民地主義の下で抑圧されていた人びとが常に非常事態＝戦争状態であったことを忘却することではないだろう(まさ

しくこれは「戦後」に継承されるものだ。それに立憲主義が軍部を抑制していたとしても、その立憲主義が徹底された先に果たして日本帝國主義の解体はあったといえるだろうか、と問うべきである。著者の視点はあまりに内向きすぎる。だから「戦後レジームからの脱却」を息巻く自民党に対して「誤って総力戦時代に戻らないかぎり、戦後デモクラシーから脱却すれば戦前デモクラシーに戻る」なんて言葉が出てくるのである。

次回(一月九日)は遠藤興一「天皇制慈恵主義の成立」(学文社)を読む。

(羽黒仁史)

二〇二一年は、一月一六日(土)

一三時、としま区民センター403における「防衛予算分析会」から活動を開始する。三月二七日に馬毛島の基地化に反対している方をお招きした集会&防衛省デモをする準備に入っている。「武器より暮らしを」の枠組みで、防衛省交渉や院内集会なども追及するつもりだ。三月一二日には、「総行動」の霞ヶ関デモが準備されている。財務省に加え外務省にも、敵地先制攻撃力保有など軍拡反対の声を突きつけていきたい。是非、これらの行動に参加されんことを訴える。

(池田五律/アクション2020)

ハタ天日誌

12月5日(土) ●山岡照子さんを偲ぶ会

●ピープルズ・プラン研究所総会

12月6日(日) ●殺害されたホームレス女性を追悼し、暴力と排除に抗議する

キャンドルデモ (集会報告参照)

12月7日(月) ●防衛省行動

12月9日(水) ●即位大嘗祭違憲訴訟(差し止め差戻審) 第三回口頭弁論(集会報告参照)

12月12日(土) ●菅政権の暴走を許すな!

12月20日(火) ●香港連帯アクションスタンディング

タンディング

●敵地先制攻撃力保有と宇宙軍拡に反対する(集会報告参照)

12月21日(月) ●即位大嘗祭違憲訴訟(国賠請求分) 第六回口頭弁論(集会報告

参照)

●持つな! 敵地攻撃力! 敵地先制攻撃力 防衛省デモ (集会報告参照)

12月23日(水) ●オリンピックおこたわ

リンクスタンディング

集会情報 INFORMATION

開催中 2021年12月4日(土) ●天皇の戦争責任・忘却に抗する声/女性

国際戦犯法廷から20年

13時~18時(月・火・休日休館) / w

am 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館

1月16日(月) ●防衛予算分析会

13時30分~/としま区民センター

403 (JRほか池袋駅) / 主催: 大軍拡と基地強化にNO! アクション

2020 (033601-0312ほか)

1月21日(木) ●私たちは戦争を許さない

安保法制の憲法違反を考える

18時30分~/日本教育会館(地下鉄神保町駅) / 又坂常人、伊藤真ほか / 主催: 安保法制違憲訴訟全国ネットワーク (0337801260)

1月23日(土) ●オリンピックおこたわ

リンクスタンディング

●その支出に異議あり! 集会(仮)

13時30分開場/エルおおさか5F(地下鉄ほか天満橋駅) / 駒込武 / 主催: 主基田拔穂の儀違憲訴訟団

1月24日(日) ●福島原発事故から10年、

天皇出席の「東日本大震災追悼式」反対!

13時30分~/千駄ヶ谷区民会館1F(J

R原宿駅ほか) / 天野恵一、黒田節子(Z

OOM参加) / 主催: 反戦反天皇制労働

者ネットワーク関東(033601-0308)

1月30日(日) ●2021年世界の行方

アメリカと中東を中心に

18時45分開場/練馬区役所本庁舎20F

交流会場(西武池袋線練馬駅ほか) /

田原牧 / 主催: 戦争に協力しない! さ

せない! 練馬アクション (090-5208-5003池田)

2月6日(水) ~ 14日(日) ●オリンピッ

ク終息宣言2021(仮題)

12時~19時(6日15時~19時、14日12

時~17時予定) / 神楽坂セッションハ

ウス(地下鉄神楽坂駅)

2月9日(火) ●京都・主基田拔穂の儀

違憲訴訟第一回口頭弁論

11時30分~/京都地裁101号法廷(地下鉄丸太町)

2月10日(水) ●即位大嘗祭違憲訴訟(差し止め差戻審 第四回口頭弁論

13時15分開場/東京地裁708号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

2月11日(木・休) ●桜の国の悲しみ、

菊の国への抗い

13時~/石川逸子/wam 女たちの

戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館*予約制

●反「紀元節」デモ

16時集合/日本キリスト教会館4F(地下鉄早稲田駅ほか) / 主催: 「紀元節」と「天皇誕生日奉祝」に反対する2・11

— 23連続行動 (090-3438-0263)

2月14日(日) ●天皇制とオリンピック

消えた「日の丸」事件

13時30分~/佐野通夫/静岡県男女共

同参画センターあざれあ5F (JR静岡駅) / 主催: 「戦後講座」実行委員

会、天皇制を考える会(静岡)(連絡先: 080-69123623山河)

2月23日(火・休) ●「歌会始」が強化

する天皇制

13時~/内野光子/wam 女たちの

戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館*予約制

●「天皇代替わり」とは何であったか

13時15分開場/文京区民センター2A

(地下鉄春日駅ほか) / 天野恵一、桜井

大子、北野誉 / 主催: 「紀元節」と「天

皇誕生日奉祝」に反対する2・11 23連

続行動

*会場等の理由により中止・延期の可能性あり。主催者へのご確認を。

●年明け先恵し。それでも事態は動く。

だから私らもか。(木菟)

●早くマスクを外して歓談できる日が来てほしい。でもワクチンは怖い(羊)

●忘年会禁止、新年会禁止、それでもい

まからGOTO宴会(蝙蝠)

●レッツGOTO宴会! 秘密はだ

めだよ、ね(猿)

●年末まで、反原発運動の会議、オンラ

イン講座でヘタヘタ。それでも作業に(熊)

●宴会行ってエエンカイ?(貂)

